

がるツていふからよ。」

「だから、皆で祕すんだから、せめて三ちゃんが聞かせて呉れたつて可いぢやないかね。」

「む、ぢや話すだがね、おらが饒舌つたつて、皆にいつちや不可えだぜ。」

「誰が、そんなことをいふもんですか。」

「お濱ッ兒にも内證だよ。」

と密と伸上つて又縁側から納戸の母衣蚊帳を差覗く。

「嬰兒が、何を知つてさ。」

「それでも夢に見て魔されら。」

「一寸、そんなに恐怖い事なのかい。」と女房は縁の柱につかまつた。

「え、何、おらがベソを搔いて、理右衛門が念佛を唱へたくらるな事だけんども。そら、姉さん、

此の五月、三日流しの鯉船で二晩沖で泊つたつけよ。中の晩の夜中の事だね。

野だも山だも分んねえ、茫とした海の中で、晩めに夕飯を食つたあとだよ。

晝間ツからの霧雨がしとく降りになつて來たで、皆胸の間へもぐつてな、そんな時に千太どん

が漕がしつけれ。

急に、お、寒い、お、寒い、風邪揚句だ不精せう。誰ぞかはんなはらねえかつて、艦からドン

と飛び下りただ。

船はぐらくとしただがね、それで止まるやうな波ぢやねえだ。どんぶりこッこ、すつこッこ、

陸へ百里やら五十里やら、方角も何も分らねえ。」

女房は打領いた襟さみしく、乳の張る胸をおさへたのである。

六

「晩飯の茶に、鹽からさ嘗め過ぎた。どれ、糠雨でも飲むべい、とつてな、理右衛門どんが入交はつて漕がしつけれ。」

や、おぞいな千太、われ、えてものを見て逃げたな。と艦で爺さまがいはつしやるとの、馬鹿

いはつしやい、ほんとうに寒氣がするだつて、千太は天窓から襦袢被つてころげた達磨よ。

ホイ、ア、ホイ、と浪の中で、幽に呼ばる聲がするだね。

何處からだか分んねえ、近いやうにも聞えれば、遠いやうにも聞えるだ。

來やがった、來やがった、陽氣が悪いとおもつたい！ おらも何うも疝氣がきざした。さあ、

誰ぞ來て遣つてくれ、些と踞まねえぢや、筋張つてしよ事がない、と小半時で又理右衛門爺さま

が潛つただよ。



われ漕げ、頭痛だ、汝漕げ、脚氣だ、と皆苦い顔をして、出人がねえだね。  
平胡坐で一寸磁石を見さしつけえ、此家の兄哥が、奴、汝漕げ、といはしつたから、何の氣もつかねえで、船で達者なのは、おらばかりだ、おつとまかせ。」と、奴は顛卷の輪を大きく腕いっぱい占める眞似して、

「いきなり艦へ飛んで出ると、船が波の上へ橋にかゝつて、雨で迂るといふもんだ。

どっこいな、と腰を極めたが、づつしりと手答へして、槻の大木根こそぎにしたほどな大い船の奴、のツしりと搔いただがね。雨がしよぼ〜と顛卷に染みるばかりで、空だか水だか分らねえ。はあ、晝間見る遠い處の山の上を、ふは〜と歩行くやうで、底が轟々と沸えくり返るだ。

ア、ホイ、ホイ、アホイと變な聲が、眞暗な海にも隅があつて其の隅の方から響いて來ただよ。西さ向けば、西の方、南さ向けば南の方、何でもおらがの向いた方で聞えるだね。浪の畝ると同一に聲が浮いたり沈んだり、遠くなつたりな、近くなつたり。

其内ぼや〜と火が燃えた。船から、沖へ、ものの十四五町と眞黒な中へ、ぶく〜と大きな泡が立つやうに、ぼつと光らあ。

やあ、火が點れたいつて、おらあ、吃驚して喚くとな、……姉さん。」

「お、」と女房は變つた聲音。

「黙つて、黙つて、と理右衛門爺さまが胴の間で、苦の下でいはつしやる。

また、千太がね、彼もよ、陸の人魂で、十五の年まで見ねえけりや、一生逢はねえといふんだが、十三で出つくはした、奴は幸福よ、と吐くだあね。

おらあ、それを聞くと、船づか握つた手首から、寒くなつたあ。」

「……まあ、厭ぢやないかね、それでペソを搔いたんだね、無理はないよ、恐怖いわねえ。」

とおくれ毛を風に吹かせて、女房も悚然とする。奴の顔色、赤蜻蛉、黍の穂も夕づく日。

「そ、そんなくれえで、お濱ッ兒の婿さんだ、そんなくれえでペソなんか搔くべいか。

炎といふだか、變な火が、燃え燃え、此方へ來さうだで、漕ぎ放すべいと船をおしただ。

姉さん、然うすると、其の火がよ、大方浪の形だんべい、おらが天窓より高くなつたり、船底へ崖が出来るやうに沈んだり、ぶよ〜と轉げやあがつて、船脚へついて、海蛇ののたくるやうについて來るだ。」

「……………」

「そして何よ、ア、ホイ、ホイ、アホイと厭な懸聲がよ、火の浮く時は下へ沈んで、火の沈む時は上へ浮いて、上下に底澄んで、遠いのが耳について聞えるだ。」



「何でも、はあ、おらと同じやうに、誰か其の、炎さ漕いで来るだがね。  
傍へ來られてはなんねえだ、と櫓づかを刻んで、急いでしやくると、はあ、不可え。  
向うも、ふはくと疾くなるだ。

こりや、なんねえ、しよことがない、ともう打ちやらかして、おさへて突立つてびく／＼して  
見て居たらな。矢張それでも、來やあがつて、ふはりとやつて、鳥のやうに、舳の上へ、水際さ  
離れて、たかつたがね。一あふり風を食つて、向うへ、ぶく／＼とのびたつけよ。又いびつ形に  
圓くなつて、ぼやりと黄色い、薄濁りの影がさした。大きな船は舳から胴の間へかけて、半分ば  
かり、黄色くなつた。婦人がな、裾を擴げて、膝を立てて、飛乗つた形だつけ。一ぱし大きさも  
大きいで、櫓が上つて、向うへ重くなりさうだに、はや他愛もねえ輕いのよ。

おらあ、わい、というて、櫓を放した。

そんな時だ、われの、顔は眞蒼だ、然ういふ汝の面は黄色いぜ、と苦の間で、てん／＼がいつた  
あ。——あやかし火が通つたよ。

奴、黙つて漕げ、何ともするもんぢやねえツて、此家の兄哥が、いはつしやるで、どうするも

んか。おら屈んでな、密と其の火を見て遣つた。

ぼやりと黄色な、底の方に、うよく／＼と何か動いてけつから。」

「えッ、何さ、何さ、三ちゃん、と忙しく聞いて、女房は庇の陰。

日向の奴も、暮れかゝる秋の日の黄ばんだ中に、薄黒くもなんぬるよ。

「何だか些とも分らねえが、赤目鯨の腸さ、引ずり出して、たゞきつけたやうな、うよく／＼とし  
たものよ。

どす赤いんだの、うす蒼いんだの、にち／＼舳の板にくつついて居るやうだつけ。

すぼりと離れて、海へ落ちた、ぐる／＼と廻つただがな、大のしに颯とにして、一浪で遠くま  
で持つて行つた、何處かで魚の目が光るやうによ。

おらが肩も軽くなつて、船はすら／＼と迂り出した。胴の間ぢや寂りして、幽かに鼾も聞える  
だ。夜は恐ろしく更けただが、浪も平になつただから、おらも息を吐いたがね。

えてものめ、何が息を吐かせべい。

アホイ、アホイ、とおらが耳の傍で又呼ばる。

黙つて漕げ、といはつしやるで、おらは、スウとも泣かねえだが、腹の中で懸聲さするかと思  
つただよ。



厭だからな、聞くまいとして頭あ掉つて、耳を紛らかして居たつげが、畜生、船に憑いて火を呼ぶだとよ。

波が平だで、なほと不可え。火の奴め、苦なしでふはくとのしをつた、爾時は、おらが漕いで居る船の方へさ、ぶくく〜と泳いで来たが、急にぼやつと擴がつた、狸の糞丸八疊敷よ。そこら一面、波が黄色に光つただね。

其の中に、はあ、細長い、ぬめらとした、黒い島が浮いたつげ。

あやかし火について、そんな晩は、鮫の奴が化けるだど……あとで爺さまがいはしつた。

然ういや、目だつべい。眞赤な火が二つ空を向いて、其の背中の突先に睨んで居たが、しばらくするとな。いまの化鮫めが、微塵になつたやうに、大きい形はすぼりと消えて、百とも千とも數を知れねえ、いろんな魚が、すらく〜すらく〜、黄色な浪の上を渡りをつたが、化鮫めな、さまざまにして見せる。唐の海だか、天竺だか、和蘭陀だか、分ねえ夜中だつげが、おらあそんな事で泣きやしねえ。」と奴は一息に勇んでいつたが、言を途切らし四邊を視めた。

目の前なる砂山の根の、其の向き合へる猛獸は、薄の葉とともに黒く、海の空は浪の末に黄をばかしてぞ紅なる。

八

「然うする内に、又お猿をやつて、ころりと屈んだ人間ぐれえに縮かまつて、其處等一面に、颯と暗くなつたと思ふと、あやし火の奴め、ぶら〜と裾に泡を立てて、いきをついて畝つて来て、今度はおらが足の舵に搦んで、ひら〜と燃えただよ。

おらあ、目を塞いだが、鼻の尖だ。艦へ這上りさうな形よ、それで片つべら燃えのびて、おらが持つて居る櫓をつかまへさうにした時、おらが手は爪の色まで黄色くなつて、目の玉も矢張其の色に染まるだかね。だぶり〜舳さ打つ波も船も、黄色だよ。それでな、姉さん、金色になつて光るなら、金の船で大丈夫といふもんだが、あやかしだから然うは行かねえ。

時々煙のやうになつて船の形が消えるだね。浪が眞黒に畝つてよ、其毎に化物め、いきをついて又燃えるだ。

おら一生懸命に、櫓で掻のめして呉れたけれど、火の奴は舵にからまりくさつて、はあ、婦人の裾が巻きついたやうにも見えれば、爺の腰がしがみついたやうでもありよ。大きい鮫鰭が、腹の中へ、白張提灯鵜呑みにしたやうにもあつた。

こん畜生、こん畜生と、おら、おだんだを踏んだもんだで、舵へついたかよ、と理右衛門爺さ



まがいはつしやる。え、引からまつて點れくさるだ、というたらな。よくねえな、一あれ、あれようぜ、と滅入つた聲で松公が然ういつけえ。

奴や。

ひやあ。

其のあやし火の中を覗いて見ろい、いかいこと亡者が居らあ、地獄の状は一見えた、と千太どんがいふだあね。

小兒だ、馬鹿をいふない、と此家の兄哥がいはしつけ。

おら堪んなくなつて、ベツを搔きく、おいく恐怖くつて泣き出したあだよ。」

いはれは慙くと聞えたが、女房は何にもいはず、唇の色が褪せて居た。

「苦を上げて、ぼやりと光つて、こんの兄哥の形がな、暗中へ出さしつた。

おれに貸せ、奴寝ろい。なるほどうつたうしく憑きやあがるツて、ハツと掌へ呼吸を吹かしつたわ。

一しけ来るぞ、騒ぐな、といつて櫓づかさ取つて、眞直に空を見さしつたで、おらも、ひとりでにすつこむ天窓を上げて視めるとな、一面にどす赤く濁つて來ただ。波は、其處らに眞黒な小山のやうな海坊主が、かさなり合つて寝てるやうだ。

おら胴の間へ轉げ込んだよ。こゝにもころくくと八九人さ、小さくなつてすくんで居るだね。何處だも知んねえ海の中に、船さ唯一艘で、目の前さ、化物に取巻かれてよ、やがて暴風雨が來ようといふだに、生きて働くのはこんの兄哥、唯一人だと思や心細いけんどもな、兄哥は船頭、こんな時のお船頭だ。」

女房は引入れられて、

「まあ、ねえ、」とばかり深い息。

奴は高慢に打傾き、耳に小さな手を翳して、

「轟——と唯鳴るばかりよ、長延寺様さ大釣鐘を半日天窓から被つたやうだね。

うとくと恚う眠つたつべ。相撲を取つて、ころり投げ出されたと思つて目さあけると、船の中は大水だあ。あかを波み出せ、大變だ、と船も人もくるく舞ふだよ。

苦も何も吹飛ばされた、恐しい音ばかりで雨が降るとも思はねえ、天窓から水びたり、眞黒な海坊主め、船の前へも後へも、右へも左へも五十三。ぬくくと肩さ並べて、手を組んで突立つたわ、手を上げると袖の中から、口を開くと咽喉から湧いて、眞白な水柱が、から、倒にざあざあと船さ目がけて突蒐る。

アホイ、ホイと何處だやら呼ばる聲さ、彼方にも此方にも耳について聞えるだね。」



「爾時さ、船は八丁船になつたがな、おら、が呼ばる聲ぢやねえだ。矢張おなじ處に、舵についた、あやし火のあかりでな、影のやうな船の形が、薄ぼんやり、鼠色して煙が吹いて消える工合よ、すつ飛んぢやする〜と浮いて行く。

難有え、島が見える、着ける〜、と千太が喚く。やあ、何處のか船も漕ぎつけた、島が其處に、と理右衛門爺さま。直さ其處に、すく〜と山の形さあらはれて、暗の中突貫いて大幅な樹の枝が、激のあひだに揺ぶれてな、帆柱さ突立つて、波の上を泳いでるだ。

血迷つたか此奴等、爺様までが何をいふよ、島も山も、海の上へ出たものは石塊一ツある處ぢやねえ。暗礁へ誘ひ寄せる、連を呼ぶ幽霊船だ。氣を確に持たつせえ、弱い音を出しやあがるなッて、此家の兄哥が怒鳴るだけんど、見す〜天竺へ吹き流されるだ、地獄の土でも構はねえ、陸へ上つて呼吸が吐きたい、助け船——なんのつて弱い音さ出すのもあつて、七轉八倒するだでな、兄哥眞直に突立つて、ぶるツと身震をさしつけえよ、突然素裸になつただね。」

「内の人が、」と聲を出して、女房は唾を呑んだ。  
「兄哥がよ。おい。」

あやかし火さ、まだ舵に憑いて放れねえだ、天窓から黄色に光つた下腹へな、鮪繩さ、ぐるぐると巻きつけて、其の片端を、胴の間の横木へ結へつけると、さあ、念ばらした、娑婆か、地獄か見届けて来るッてな、此處さ、はあ、こんの兄哥が、渾名に呼ばれた海雀よ。鳥のやうにびらりと刎ねたわ、海の中へ、飛込むでねえ——眞白な波のかさなり〜崩れて来る、大きな山へ——

一 駈上るだ。  
百尋ばかり束ね上げた鮪繩の、舷よく高かつたのがよ、一掬ひにづつと伸した！其の、十丈、十五丈、弓なりに上から覗くのやら、反りかへつて、睨むのやら、口さあげて威すのやら、蔽はりか、つて取り圍んだ、黒坊主の立はだかつて居る中へ浪に揉まれて行かしつけえ、船の中では其の綱を手手に取つて、理右衛門爺さま、其時にお念佛だ。

やつと時が立つて戻つてござつた。舷へ手をかけて、神様のやうな顔を出して、何にもねえ、八方から波を打つける暗礁があるばかりだ、迷ふな、ツていはしつた。

お船頭、御苦勞ぢや、御苦勞ぢや、お船頭と、皆握拳で拜んだだけだかね。  
坊主も島も船の影も、さらりと消えてよ。其處ら山のやうな波ばかり。

急に、あれだ、また其處等ぢや、空も、船も、人の顔も波も大きい〜海の上さ半分仕切つて薄黄色になつたでねえか。



え、何をやるだ、あやかしめ、又擴がつたなツて、皆くそ焼けに怒鳴つたつけえ。然うぢやねえ、東の空さお太陽さまが上らつしつたが、其處でも、姉さん、天と波と、上下へ放れただ。昨夜、化鮫の背中出したやうに、一面の黄色な中に薄ぼんやり黒いものがかゝつたのは、獄の堂が目の果へ出て来ただよ。」

女房はほつとしたやうな顔色で、

「まあ、可かつたねえ、それぢや濱へも近かつたんだね。」

「思つたよりは流されて居ねえだよ、それでも沖へ三十里ばかり出て居たつぺい。」

「三十里、」

と又驚いた状である。

「何だなあ、姉さん、三十里ぐれえ何でもねえや。」

それで、はあ夜が明けると、黄色く環どつて透通つたやうな水と天との間さ、薄あかりの中をいろ／＼な、片手で片身の奴だの、首のねえのだの、蝦蟇が呼吸吹くやうなのだの、犬の背中へ炎さ絡まつて居るやうなのだの、牛だの、馬だの、異形なものが、影燈籠見るやうにふは／＼まよつて、さつさと駈け抜けて何處かへ行くだね。」

十

「あとで、はい、理右衛門爺さまも然ういつけえ、此の年になるまで、昨夜ぐれえ執念深えあやかしの憑いた事はねえだつて。」

姉さん。

何だつて、彼だよ、そんなに夜があけて海のばけものどもさ、する／＼駈け出して失せるだに、手許が明るなつて、皆の顔が土氣色になつて見えてよ、艀が白うなつたのに、艀にくひついた、えてものめ、未だ退かねえだ。

お太陽さまお庇だね。其色が段々蒼くなつてな、些とづゝ固まつて搔いすくまつたやうだつけや、ぶく／＼と裾の方が水際で膨れたあ、蛭めが、吸ひ肥つたやうになつて、ほとりの波の上へ落ちたがね、から／＼と明るなつて、蒼黒い海さ、日の下で突張つて、刎ねてるだ。

まあ、めでてえ、と皆で顔を見たつけや、めでてえは其ばかりぢやねえだ、姉さんも、新しい衣物が一枚出来たつぺい、あん時の鯉さ、今年中での大漁だ。

舳に立つて釣らした兄哥の身のまはりへさ、銀の鯉が降つたつけ、やあ、姉さん。」  
と暮れかゝる蜘蛛の圍の檐を仰いだ、奴の出額は暗かつた。



女房もそれなりに咽喉ほの白う仰向いて、目を閉ぢて見る、胸の中の覺え書。

「ぢや何だね、五月雨時分、夜中からあれた時だね。」

まあ、お前さんは泣き出すし、爺さまもお念佛をお唱へだつて。内の人は其の恐しい浪の中で、生命がけで飛込んでさ。

私はたゞ、波の音が恐しいので、宵から門へ鎖をおろして、奥でお濱と寝たつけ、ねえ。

どんな烈しい浪が來ても裏の崖は崩れない、鐵の壁だ安心しろつて、内の人がおいひだから、其ればかりをたよりにして、それでもドンと打つかる度に、崖と浪とで戦をする、今打つた大砲で、岩が破れやしまいかと、坊やを緊乎抱くばかり。夜中に乳のかれるのと、寂しいばかりを慾にして、冷いとも寒いとも思はないで寝て居たのに、然だつたのか、ねえ、三ちゃん。

そんな、荒浪だの、恐しいあやかし火とやらだの、黒坊主だの、船幽靈だのの中で、内の人は海から見や木の葉のやうな板一枚に乗つて居てさ、と女房は首垂れつ、

「私にや何にもいはないんだもの……」と思はず襟に一雫、ほろりとして、  
「濟まないねえ。」

奴は何の仔細も知らず、慰め顔に威勢の可い聲、

「何も濟まねえつて事アありやしねえだ。よう、姉さん、お前に寒かつたり冷たかつたり、辛い

思ひさ、さらせめえと思ふだから、兄哥が然うして働くだ。おらも何だぜ、もう、そんな時さあつたつてベソなんか搔きやしねえ、お濱ツ子の婿さんだ、一所に海へ飛込むぜ。

其かはり今もいつけえよ。兄哥のために姉さんが、お膳立てしたり、お酒買つたりよ。おら、酒は飲まねえだ、お芋で可いや。

よツしよい、と鯉さ積んで波に乗込んで戻つて來ると、……濱に煙が靡きます、あれは何ぞと問うたれば、

と、いたいけに手をたゞき、

「石々合はせて、鹽波んで、玩弄のバケツでお芋煮て、かじめをちよろ／＼焚くわいのだ。……よう姉さん、」

奴は急にぬいと立ち、はだかつた胸を手で仕切つて、

「おらが此處まで大きくなつて、お濱ツ子が濱へ出て、まゝ事するは何時だらうなあ。」  
女房は夕露の濡れた目許の笑顔優しく、

「あゝ、そりやもう今日明日といふ内に、直きに娘になるけれど、あの、三ちゃん、」  
と調子をかへて、心ありげに呼びかける。



「あゝ、」

「あのね、私は何も新しい衣物なんか欲しいとは思はないし、坊やも、お菓子も用らないから、お前さん、何うぞ、お婿さんになつて呉れる氣なら、船頭はよして、何ぞ他の商賣にしておくれな、姊さん、お願ひだが何うだらうね。」

と思ひ入つたか言もあらため、縁に居すまひもなほしたのである。

奴は遊び過ぎた黄昏の、鴉の鳴くのをきよろしく聞いて、浮足に目も上つき、

「姊さん、稲葉丸は今日さ日歸りだつぺいか。」

「あゝ、内でもね。今日は晩方までに歸るつて出かけたがね、まあ、お聞きよ、三ちゃん、」

とそはくするのを壓へていつたが、奴はよく聞かないで、

「姊さんこそ聞きねえな、あらよ、堂の嶽から、鳥が出て來た、カオ、カオもねえもんだ、盜賊をする癖にしやあがつて、漁さへ當ると旅をかけて寄つて來やがら、姊さん船が沖へ來たぜ、大漁だ大漁だ、」

と鳥の下で小さく躍る。

「ぢや、内の人も歸つて來よう、三ちゃん、濱へ出て見ようか。」と良人の歸る嬉しさに、何事も忘れた狀で、女房は衣紋を直した。

「まだ、見えるやうな處まで船は入りやしねえだよ。見さつせえ、其處らの柿の樹の枝なんか、ほら、ざわくと鳥めい、えんこをして待つてやがる。」

五六里の處、嗅ぎつけて來るだからね。此處等に待つて居て、濱へ魚の上るのを狙ふだよ、濱へ出たつて遠くの方で、船は漸と此の鳥ぐれえにしか見えやしねえや。

やあ、見さつせえ、また十五六羽遣つて來た、沖の船は當つたぜ。

姊さん、又、着ものが出來らあ、チヨツ、」

舌打の高慢さ、

「おらも乗つて行きや小遣が貰えたに、號外を遣つて儲け損なつた。お濱ッ兒に何にも玩弄物が買へねえな。」

と出額をがツくり、爪先に蠣殻を突ツかけて、赤蜻蛉の散つたあとへ、ぼたくと溢れて映る、鳥の影へ足礫。

「何をまたカオくだ、おらも玩弄物を、買を、買をだ。」

黙つて見て居る女房は、急に又しめやかに、



「だからさ、三ちゃん、玩弄物も着物も要らないから、お前さん、漁師でなく、何ぞ他の商賣を  
するやうに心懸けてお呉んなさいよ。」といふ聲もうるんで居た。

奴ははじめて口を開け、けろりと眞顔で向直つて、

「何だつて、漁師を止めて、何だつて、よ。」

「だつても、そんな様子ぢや、海にどんなものが居ようも知れない、ね、恐いぢやないか。」

内の人や三ちゃん、然うやつて私たちを留守にして海へ漁をしに行つゝる間に、あらしが來  
たり浪が來たり、そりや未だいゝとして、もしか、あの海から上つて私たちを漁しに來るものが  
あつたらどうしよう。貝が殻へかくれるやうに、家へ入つて寤んで居ても、向うが強ければ捉ま  
へられるよ。お濱は嬰兒だし、私は慙うやつて力がないし、それを思ふと眞個に心細くつてなら  
ないんだよ。」

としみづくいふのを、呆れた顔して、聞き澄ました、奴は上唇を舌で嘗め、眦を下げて哄々と  
ふき出し、

「馬鹿あ、馬鹿あいはねえもんだ。へ、へ、へ、魚が、魚が人間を釣りに來てどうするだ。尾で  
立つてちよこゝ歩行いて、鰭で棹を持つのかよ、よう、姉さん。」

「そりや鰹や、鯖が、棹を背負つて、其處から濱を歩行いで來て、軒へ踞むとはいはないけれど、  
底の知れない海だもの、どんなものが棲んで居て、陽氣の悪い夜なんぞ、浪に乗つて來ようも知  
れない。晝間だつて、お前、此處へ來たものは、——今日は、三ちゃんばかりぢやないか。」  
と女房は早や薄暗い納戸の方を顧みる。

十一

「あゝ、何だか陰氣になつて、穴の中を見るやうだよ。」

とうら寂しげな夕間暮、生干の紅絹も黒ずんで、四邊はものの磯の風。

奴は、舊來た黍からの瘦せた地藏の姿して、ずらりと立並ぶ徑を見返り、

「もつと町の方へ引越して、軒へ瓦斯燈でも點けるだよ、兄哥もそれだから稼ぐんだ。」

「否、私や、何も今のくらしにどう慙うと不足をいふんぢやないんだわ。私は我慢をするけれど  
ね、お濱が可哀さうだから、號外屋でも何んでもいゝ、他の商賣にしておくれつて、三ちゃん、  
お前に頼むんだよ。内の人か心配をすると悪いから、お前決して、何んにもいふんぢやないよ、  
可いかい、解つたの、三ちゃん。」

と因果を含めるやうにいはれて、枝の鴉も頷き顔。

「む、ぢや何だ、腰に鈴をつけて駈けまはるだ、歸つたら一番、爺様と相談すべいか、だつて、



お錢にやらねえとよ。」

と奴は悄乎げて指を噛む。

「否、今が今といふんぢやないんだよ。突然そんな事をいつちや不可いよ、まあ、話だわね。」

と軽くいつて、氣をかへて身を起した、女房は張板を密と撫で、

「慾張つたから乾き切らない。」

「何、姉さんが泣くからだ、」

と唐突にいはれたので、急に胸がせまつたらしい。

「あ、」

と片袖を目にあてたが、はつとした風で、又納戸を見た。

「がさくするね、鴉が入りやしまいねえ。」

三之助は又笑ひ、

「海から魚が釣りに來ただよ。」

「あれ、厭、驚かしちゃ……」

お濱がむづかつて、蚊帳が動く。

「そら御覽な、目を覺ましたわね、人を驚かすもんだから、」

と片頬に莞爾、一寸睨んで、

「あいよ、あいよ、」

「やあ、目を覺したら密と見べい。おらが、いろつて泣かしちゃ、仕事の邪魔するだから、先刻から辛抱してただ。」と、かごとがましく身を曲る。

「お逢ひなさいまし、ほ、ほ、ねえ、お濱、」

と女房は暗い納戸で、母衣蚊帳の前で身動ぎした。

「おつと、」

奴は縁に飛びついたが、

「あ、跣足だ姉さん。」

と脛をもちく。

「可よ、お上りよ、」

「だつて、姉さんは綺麗すきだからな。」

「構はないよ、ねえ、」

といつて、抱き上げた兒に頬摺しつゝ、横に見向いた顔が白い。

「やあ、もう笑つてら、今泣いた烏が、」



と縁端に遠慮して遠くで顔をふつて、あやしたが、

「眞個に騒々しい鳥だ。」

と急に大人びて空を見た。夕空にむら／＼と嶽の堂を流れて出た、一團の雲の正中に、颯と揺れたやうにドンと一發、ド、ド、ドンと波に響いた。

「三ちゃん、」

「や、又爺さまが鴉をやつた。遊んでるつて叱られら、早くいつて壓へべい。」

「まあ、遊んでおいでよ。」

と女房は、胸の雪を、兒に暖く解きながら、斜めに抱いて納戸口。

十三

「ねえ、今に内の人が歸つたら、茶のものを分けてお貰ひ、然うすりや叱られはしないからね。

何だか、今日は寂しくつて、心細くつてならないから、もう少しと、遊んで行つてお呉れ、ねえ、

お濱、もうお父さんがお歸りだね。」

と顔に顔、兒にいひながら縁へ出て來た。

おくれ毛の、こぼれかゝる耳に響いて、號外——號外——とうら寂しい。

「おや、最ういつて了つたんだよ。」

女房は顔を上げて、

「小兒だねえ。」

と獨りでいつたが、檐の下なる戸外を透かすと、薄黒いのが立つて居る。

「何だねえ、人をだましてさ、未だ、其處に居るのかい、此奴、」

と小兒に打たせたさうに、つか／＼と寄つたが、ぎよつとして退つた。

檐下の黒いものは、身の丈三之助の約三倍、朦朧として頭の圓い、袖の平たい、入道であつた。

女房は身をしめて、キと唇を結んだのである。

時に身じろぎをしたと覺しく、イんだ僧の姿は、張板の横へ揺れたが、丁ど濱へ出る其の二頭の猛獸に護られた砂山の横穴の如き入口を、幅一杯に塞いで立つた。背高き形が、傍へ少し離れたので、最う、とつぶり暮れたと思ふ暗さだつた、今日は未だ、一條海の空に残つて居た。良人が乗つた稻葉丸は、其下あたりを幽な横雲。

それに透すと、背のあたりへぼんやりと、何處からか霧が迫つて來て、身のまはりを包んだので、瘠せたか、肥えたか知らぬけれども、窪んだ目の赤味を帯びたのと、尖つて黒い鼻の高いのが認められた。衣は潮垂れては居ないが、潮は足あとのやうに濡れて、砂濱を海方へ續いて、且



つ其の背のあたりが連りに息を吐くと見えて、戦いて居るのである。

心弱き女房も、直ちにこれを、怪しき海の神の、人を漁るべく海から顯はれたとは、餘り目のあたりゆゑ考へず。女房は、唯總毛立つた。

けれども、厭な、氣味の悪い乞食坊主が、村へ流れ込んだと思つたので、然う思ふと同時に、ばた／＼と納戸へ入つて、箆の傍なる暗い隅へ、横ざまに片膝つくつと、忙しく、しかし、殆んど無意識に、鳥目を。

早く去つて貰ひたさの、女房は自分も急いで、表の縁へする／＼と出て、此方に控へながら、

「はい、」

といふ、それでも聲は優しい女。

薄黒い入道は目を留めて、其の舉動を見るともなしに、此方の起居を知つたらしく、今、報謝をしようと嬰兒を片手に、掌を差出したのを見も迎へないで、大儀らしく、かつたるさうに頭を下に垂れたまゝ、緩く二ツばかり頭を掉つたが、然も横柄に見えたのである。

又泣き出したを揺りながら、女房は手持無沙汰に清しい目を睜つたが、

「何です、何が欲しいんですね。」

となほ物貰ひといふ念は失せぬ。

稍あつて、鼠の衣の、何處が袖ともなしに手首を出して、僧は重いもののやうに指を擧げて、其の高い鼻の下を指した。

指すとともに、ハツといふと息を吐く。

渠飢ゑたり矣。

「三ちゃん、お起きよ。」

あゝ居て呉れば可かつた、と奴の名を心ゆかし、女房は氣轉らしく呼びながら、又納戸へ。

#### 十四

強盗に出逢つたやうな、居もせぬ奴を呼んだのも、我ながら、それにさへ、動悸は一倍高うなる。

女房は連りに心急いで、納戸に並んだ臺所口に片膝つきつゝ、飯櫃を引寄せて、及腰に手桶から水を結び、効々しう、嬰兒を腕に抱いたまゝ、手許も上の空で覺束なく、三ツばかり握飯。

潮風で漆の乾びた、板昆布を折つたやうな、折敷にのせて、カタリと櫃を押遣つて、立てて居た踵を下へ、直ぐに出て來た。

「小人數の内ですから、澤山はないんです、私を上げますからね、はやく持つて行つて下さい



まし。」

今度は稍近寄つて、僧の前へ、片手、縁の外へ差出すと、先刻口を指したまふ、鱗でもありさうな汚い胸のあたりへ、ふらりと釣つて居た手が動いて、ハタと横に拂ふと、發奮か、冴か、折敷ぐるみ、バツタリ落ちて、昔々、蟹を潰した蒔柿に似てころりと飛んだ。

僧はハアと息が長い。

餘の事に凝と視て、我を忘れた女房、

「何をするんですよ。」

一足退きつゝ、

「そんな、そんな意地の悪いことをするもんぢやありません、お前さん、何が、然う氣に入らないんです。」

と屹といつたが、腹立つ下に心弱く、

「御坊さん、おむすびなんか、差上げて、失禮だとおつしやるの。」

それでは御膳にしてあげませうか。

然うませうかね。

それでははじめから、然うしてあげるのだつたんですが、手はなし、恚うやつて小兒に世話が

焼けますのに、入相で忙しいもんですから。……あの、茄子のつき加減なのがありますから、それでお茶づけをあげませう。」

薄暗がりには頷いたやうに見て取つた、女房は何となく心が晴れて機嫌よく、

「ぢや、然うませう。お前さん、何にもありませんよ。」

勝手へ後姿になるに連れて、僧はのツそり、夜が固つて入つたやうに、ぬいと縁側から上り込

むと、表の六疊は一杯に暗くなつた。

これにギョツとして立淀んだけれども、さるにても婦人一人。

唯、些とも早く無事に歸して了はうと、灯をつける間ももどかしく、良人の膳を、と思ふにつけて、自分の氣の弱いのが口惜かつたけれども、目を瞑つて、やがて嬰兒を襟に包んだ胸を膨らかに、膳を据ゑた。

「あの、なりたけ、早くなさいましょ、もう追ツつけ歸りませう。内のはいつこくで、氣が強いんでござんすから、知らない方を恚うやつて、又間違ひにでもなると不可ません、ようござんすか。」

と茶碗に堆く装つたのである。

爾時、間の四隅を籠めて、眞中處に、のツしりと大胡坐で居たが、足を向うさまに突き出すと、



膳はひしやげたやうに音もなく覆つた。

「あれえ、」

と驚いて女房は腰を浮かして遁げさまに、裾を亂して、ハタと手を支き、

「何ですねえ。」

僧は大なる口を開けて、又指した、其の指で、かゝる中にも袖で庇つた、女房の胸をじり、とさしつゝ、

(兒を呉れい。)

と聞いたと思ふと、最う何にも知らなかつた。

我に返つて、良人の姿を一目見た時、犇と取違つて、わな／＼と震へたが、餘り力強く抱いた所爲か、お濱は冷くなつて居た。

こんな心弱いものに留守をさせて、良人が漁る海の幸よ。

其夜はやがて、砂白く、崖蒼き、玲瓏たる江見の月に、奴が號外、悲しげに浦を駈け廻つて、蒼海の浪ぞ荒かりける。

## 月夜遊女



「音やい、良い月夜ぢやねえかよ、」

と風に揺らるゝ案山子のやうに、ふらくくと月に描き出だされた、看籠を振分けに、つつしり重量のある天秤を擔いで、前に立つて歩いたのが、鼠色に艶のある浅霧をかけた、一むらの樹立を前に見ながら、其處らの芋蕷の葉を領かしむべく、野良聲の調子高。

「まるで晝間だつぺい。いつかの盆踊の夜中のやうで、影だか人だか分んねえ、見さつせえ、おらが道陸神に魂さ入つて生きてるだ。

やあ、音。

慥う、はあ、皎々と澄み切つた月夜となると、蟲の這ふまでが見えさうで、それで居て、何よなあ、何だか水の底でも渡るやうで、また、然うかと思ふと、夢に宙でも歩行くやうで、變に娑婆ばなれがして、物凄く、心持が茫とすらあよ、え、音。」

と話しかけても、返事せず、其の癖ひたくと足の音は、踵について聞えるので、言を途切ら

し、天秤の上へ、南瓜の捻首で、頬冠の面を、おつくふさうに振向いた。

「音やい、なぜ黙る。些と話してもして行くべいでねえか。よう、お互に、馴れた道中でも夜ふけさふけた。これから突切つて街道を折曲る、一里塚の邊さ灘だからな、よくねえよ。主もおらもなまぐさを擔いだ上に、お月様を背負つて行くだから、些とべい氣味のいゝ事はねえだ。

何か饒舌らつせえよ。

こんな時は色ばなしも魔がさすが、法談も柄にねえ、滅入るでな。小恥かしく風流人の眞似をして、お月様のうはさをするだが、主は何で黙るだよ、やあ、これ、

といつて又、廻燈籠が忘れてまはる足の運び、氣もなく、緩くなつて、

「音でえに。」

「む、よ。」

と少いのが漸と答へた。同じくこれもぼてをふつたが、背後へ笈を三つかさねた、前へ繩からげの大魚一尾、一抱へある圖抜けな鮫鱈、其狀、色好める道士に似たるを、月にさらしてあからさま、やがて地すりに荷つて居る。

天秤棒もきしむばかり、分銅がかりに重さうなのを、血氣な向顛卷で、染入る月の肩に汗はせぬが、蒼すむ魚の膚にも、かさねた笈の編目にも、たらくとあふるゝ露、霜にもならず流るゝ



ばかり。畷の隈行く小川に聲なく、一寸黙ると、しんとして、左右の刈田は何處までも雁の影さへさゝぬのである。

頬被の中に聲も滅入つて、

「音でえになあ、變だな野郎、」

「……………」

「よう、音でえは、」と、又がツくり、息をついたやうに立淀む。これにつれて、背後なる壯俊、其の顛卷の結び目を揺つて、不意に停り、

「え、待ちねえ、おら些と妙な事を考へたい。」

其の足許を覗くやうに、頬被の中に目を据ゑながら、

「止せやい、音、こんな處で妙な事なんか考へるもんでねえ。」

「でもな。まあ、さつさと歩行かねえな。」

「おい、歩行くがの。眞實だ、何だか知んねえけど、眞個よ、灘を越してしまふまではな、そんな何だぜ、妙な事なんか考へねえ方がいゝぜ。」

二

「おら又何だつて、恚う晝と夜とがらり了簡が違ふだかな、我身で我身が分らねえだよ。晝で見ねえな、新宿の濱さ土俵にして、鬼とも取組む氣だけれど、」

と、かごとがましく言ひつゞくる。

「當前よ、眞晝間何處へ鬼が出るもんか。」

と背後から元氣の可い聲。

「え、夜だつて、出られて堪りごとがあるもんか、密といはつせえよ。お前、大きな聲を出して、まるでなあ、鬼に呼出をかけるやうなもんだ。」

とぶつゝ足も拂取らない。

「呆れた臆病ツたらありやしねえや、」

「何だつて、お前、夜中今時分、此の街道を歩行くものは、はあ、新宿の濱さ擔ぎ出してから、沼間、田浦よ、金澤から杉田を山越で濱の間屋まで、まあよ、在所の夜網さ上つてから、恚うやつて夜ふけに田山さ突切つて、堀割へ行つて東さ白むまで、人幾人と、口い利いたり、てくつたり、活きて働く人間の數に限りがあるだよ。」

今夜なんぞ、利七が一番がけに、そうだを擔いで駈出したわ。三太と、八兵衛が馬力で二臺な、がたくりゝと曳出した。おらと主さ、後おさへだ、背後の方にや當分小糠蟲の影はねえと斷念



めて居るだでな。

能見堂手前で、金澤の鹽賣が、朝月夜にきら／＼と鹽を光らして來るのに出つくはしや、い、見つけものだ。考へると心細いではねえか、え、音。

ぐわつとでも言つて見ねえな、荷を放り出して一散がけに前途へ駈出して、利七や三太づれに助けて呉れい、とやりや格別。あとから來るものは人間どころか、氣心の知れた犬も居ねえと決つた日にや、え、音、心持、おらあ荷が重てえ。ぼつちり、影法師が見えねえでも、後前に夥間が歩行いて居ると思や、どれだけ力になるか知んねえが、あとおさへだけにぞく／＼すらあ。早く一里塚の難場押越して、山の下の立場の、お鐵婆さまが店さ叩いて、飯でも炊いて貰つてよ、底へ力を入れねえぢや、妙に膝節が／＼すら、よう、碌でもねえ。異な處で汽車の車についてまはつた、島田ツ首の話なんか思ひ出した。

堪らねえな。

うまく行くと、利七でえ、が、長く飲んで居りや、追ついて一處にならうも知んねえだが、此の間が我慢だぜ。あれ、一里塚が目の前に煙つて來た。また、馬のわらぢが、ふつ／＼つて、いきり立つてけつかるべい。

あれもさ、白鬮腰が息をして居るやうに見えてなんねえ。

なあ、音、ほんのこつた、怪我にも妙な事なんか考えまいぜ。いや、どっこい。」

とさしかゝる、驟から松並木へ、斜にかゝつた瓜先上り。

姿の瘠せた松並木。故道は一條白く、天窓の上に長くなつて、舊來た徑は草鞋の下から、小川を籠めて暗くなり、遙にさら／＼と水の音。音吉は足踏みして、

「何だな。なまものを擔いだやうでもねえ、主がいふことも腰つきも、はあ、牛に曳かれて居るやうだ。」

そんな氣で居たが最後よ、魚が萎えて價が下らあ、しつかりしねえな、だらしはねえ。」と顛巻を斜に射る月に、氣霜を吐いて白く笑ふ。

「は、何うでえ、意氣地がねえぜ。」

「何ていふがな、これで其處さ一里塚へかゝつて見ねえ。押被さつた椶の下に、馬の草鞋ばかり明くつてよ、鳥籠のひしやげた形のお堂の中から、あの又地藏様の申子見たやうな、爲體の分らねえ小佛が五體といふもの、異う往來を見てござる。あの前を通つて見ねえな、主だつて、ようこれ、餘りはあ、大きな口利ける義理ではあんめえ。」



「よう、」

と鮫鱈の其の大なるを、土手につけず翻然と月に、腹の光をつらりと射つ、手に笹の繩をぐいと掴んで、軽く上つた。音吉は、並木の松影、道の真中の眞明きに、おさきたちは照れた形

「さあ、おらが、さきへ行つて遣るべし、さつさと來ねえ。」

「待ちろい、あとおさへは氣がねえと言ふに、慍うなりや並んで歩行くだ。」

と横ざまに來て押並んだ、二人を合はせて四角いやうな影法師。

並木の影を横つたひ、魚、木に登る風情なる、件の逸物を願でさして、

「吉やい、おらが妙なことを考へたと謂ふのは他ぢやねえだ。」

「え、ぬかす。忘れた時分に意地悪く又妙な事を考へる、止せッてえにな。」

「よせつたつてお前等も、おらが腹の中で獨り考へるだから仕方がねえだ。チヨツ、可いや、

ぢや、黙然で歩行くとするだよ。」

と空を向いて、音吉は松の葉越に星を捜す上目づかひ。

「聞くよく。黙然ぢや滅入つてなんねえ。聞くからな、早く其の考へと云ふのを吐いつ了ひね

え。なりたけ何だぜ、變でなく聞かしてくんろよ。」

「む、おらあ、變なことを考へたが。」

とうつかり遣る。

「猶いけねえ、妙が變になつては堪らねえだ。ほう、」といふ。

「は、そんなえにお前ら、氣にするほどの事ではねえだよ。妙といへば妙よな、變といへば變

だけれど、何でもねえ事だと思へば何でもねえ。吉やい、他ぢやねえが。」

「うむ、」とおツかなびツくり、唇へ力を入れる。

「そら、」

一寸小手を押して、天秤の尖にいぶりをくれたが、此のくらなる事で、ゆツさりともしするやう

な、そんな小さな腹ではない、魚道士鮫鱈、字は泰山で、づツしりと月下に光れり。

「此の鮫鱈よ。」

「鮫鱈が……」

「妙な事を考へたと謂ふのはな。」

「ふむ、」

「何故慍う腹が大いか、といふ事よ。」

とはじめて聞いて、驚いて安堵した、吉は臆病も忘れたやうに、

「は、は、は、馬鹿野郎、くだらなく氣を揉ませやがった。お互に學校さ、ずるけた方の男だけ



れど、われ、最う些と伶俐だと思つてつきあつたが、馬鹿野郎。

何だと……

何故鮫鯨の腹さ大かいたと、當前よ。おらと、われと、何故男振が違ふだと、湯屋の娘が吐かしたも同一よ。」

「む、よ、お前ら色男だよ、色男は狐が好きだぜ、そら、其處さ一里塚だ。」

「ホ、南無阿彌陀佛々々々々々々々々々々。」

「鼻の尖にぶら下つて、然もな、おらがに食へると謂ふでもねえに、とはじめは唯見て居た内に、今の其の、腹工合を考へただがな、まあ、聞きねえ。」

こりや、はあ、どうか眞圓ツこくすると人間一人入れさうだと思つてよ。それも道理だ、ひももありや、いともあり、橙色も、樺色も、蒼いんだの、紫だの、どしこと山に籠るわけだと考へる内に、へ、おらあの、吉やい、」

「……………」

「妙な事を考へた。そら、ぱくりとあいた顎に牡丹餅だ。一番、途中で臍物を引ずり出して、肝を抜いて、芋の葉で、ぶら提げて行つて、お鐵婆さん店を起してよ……な。」

四

「お前ら温い飯い喰ひな。おらあ、こいつをぐしやくと煮て熱爛だ。鮫鯨は肝が千兩よ、黙つて居ねえ、百兩ぐれえは分けて遣るよ。」

「厭だ、野郎、最ういひぐさが強盗になりやがつた。」

止さつせえよ、悪い事を。」

主が考へるまでもねえ、鮫鯨の腹さ其のせるで大かいた。賣ものの肝を抜いて、第一お前、横濱の問屋が承知しめえよ。」

「そんな事にぬかりがあるかい。まあ、黙つて見て居ねえよ、いや、どっこいしよ。」

「あれ、荷を下ろす。やあ、飛だ處で。そら、言はねえこつちやねえ、皆呼吸を噴いて、もそもそして居る。」

と慌しくわきへ退いた。稷を溢る、月影に、一里塚から湧いて出た墓の氣勢して、のッそり這ひさうな捨草鞋。

「此の馬の草鞋をな、……臍腑のかはりにへし込んでごまかすだ。其處さぬかるやうなおらぢやねえ。」



先方だつて問屋だからな、直ぐに吊し斬りにするのでねえ。野毛の何丁目かの魚屋で、軒から馬の脊を降らすのが落よ。うまく南京町へでも入つて見ねえ、鮫鱈の腹から出現まじくした草鞋大王とか何とか云つて、其處さ破堂でも建立して祭るべいよ。」

吉は前方へ離れながら、居合腰の樹の下影、夜なしの駕籠屋が招くやうな、寂しい手つきで、頻におさへた。心がらとて自分から幽霊じみたあはれな聲で、

「石佛がござらつしやるによ、勿體ねえ〜。主や云ふことから亂暴だ、よくねえよ、〜。よさつせえ。」

第一場處柄が、よくねえだ。悪い處だ、陸灘だぜ。」

と言ひかけてぎよつとした風。猪首をすくめて、きよろ〜と、天に高い榎から、戸のない、箱の如き辻堂に、五體、晝よりは尙ほ判然と、月に露はれ見え給ふ、佛の姿を、恐々輪なりに胸して、

「へ〜、結構な、佳い處でござりますな、へ〜。其の、へ〜、悪い眞似をするな、よくねえ場處柄でと申すんで……へ……えい、音、止せッてえに……よ。」

ざわ〜と梢の風。

「ひえ〜、後生だ。これ、せめて、せめて、これ此處を出て、明い處で遣つて呉れ。」

と寒さうに立窘むを、此方は血氣でおもしろ半分、榎の根に踏みはだかり、路の眞中へ繩を弛めた、天秤白く箆に預けて、鮫鱈を横さまに、胸一杯に腹をかへして、両手で重量をこたへながら、

「馬鹿を云ふもんでねえ。故ツと明い處へ出て、盜賊する奴があるもんか。」

おまけに何だぜ、恚う見た處は安達が原だぜ。此のふくらんだ處を見ろ、裸に剝いた仰向けだ、

の腹を裂くだね、はあ、何と凄かんべい。」

と嵩にかゝつて、魚の腹に、頬ぺたを押ツつけて、

「むう、白やかで暖い。」

「喰ひ破りさうな事をする。え〜、見せえ、主が口さ耳まで裂けたやうでねえか。」

と獨りて言つて恐ろしがる。

「どりや仕事に。」

と故と思入れ、繩をさげてぬいと立つ。

「十八九といふ處だ、は、は、は、」

と高笑ひ。かさ〜と提げて出て、箆の蓋にだふりと畝らし、筒袖をぐいと揚げた、二の腕黒く、掴み手に構へて見せ、



「やがて、鮮血が、」

と心持震へて居さうな吉を見遣つて、

「あゝ、何處かで糸を繰る音がする。」

五

「様あ、駈け出すやい、腰抜けい。」

街道の並木がくれに、汽車ばしりの吉が影、一散に遁げ出した時ばかりは、初鯉を擔いだものやうであつた。

「とうとう見えなくなりやがつた、十町一のしだ、何の遁げずとも事を。」

とおツかけさうな身體の構で、其の天秤の傍を未だ離れなかつた、音吉は、見送り果てたが、氣抜けがしたやうな様子。筋を入れた腕を忘れて、何となく四邊が見られた。

一人に成つたことに心づくると、自分とても、二人の時ほど、豪傑では無かつたのである。

「何の去つちまはねえだつて可いものをよ。」

と思はず拍子ぬけの溜息をすると、言ふまでもない一里塚。前には五體の石佛、榎が上に押かぶさつた、下に誰のやら分らぬやうな、重ねた笹にたてかけた天秤棒。

繩がたるんで蓋の上に——あゝ、詰らぬことを言はねばよかつた。尋常に其の膨らかな腹のけざまに、なよ／＼と尾を垂れて、屠る手を待つ状なるが、俎を餘つた頭は、白すんだ咽喉を突張つて、覺悟して首垂れた風情はなく、もの言ひたげに頸を張つて、裂けるが如く目を睜つた、大いなる魚の目の艶は、實際猫のそれよりも輝くのである。其の大きな目がまた意地悪く目について、見まいとしても月の隈に、動かぬ光が据つたやうに瞳を射る。

思はず熟と見入つて居ると、くる／＼と動く。

ぎよツとして、傍を向いたが、動くは鮫鱈の目のみでない。

石佛の五ツの姿も、榎の枝も、馬の杓も、行方遙に小山にかゝる一幅の明い夢のやうな街道も、イむものの爪尖も、ぶる／＼と、描いた水の線の如く微かに揺れるのは、何處からともなく寒さがこゝに渡るので、こんな時、月の光が風に染みて、刻々な霜を拵へる。

其の見えない霜を、音吉は口を開けて、咽喉へ吸つて悚然とした。

「おゝ、寒い。」

一層止めようか……

と思つたけれども、此のまゝにして建場まで駈けつけるか。婆が店で、吉に逢ふと、彼奴が又、温い飯を喰つて、氣の強くなつた處、今までの遣ッ返しに、叩き潰して黒焼にして羽蟲にして



道中すがら賣られよう。

それも口惜い。

爰はどうでも鮫鱈の腹と、おらが肝をば釣かへにすべきである。

と茫乎物思ふ額へ、ひやり。

「あッ」と云ふ頸許から腰を傳つて、かさく〜と月夜を一枚、足許が、深い谷でもあるやうに沈んで落ちた。

落葉も、友を誘つて、ぱら〜と舞つて、颯とこぼれて、何時何處へやらなくなるやうなのは、搔撫でのざらだけれども、梢にも枝にも星の數よりまばらになるまで、二葉三葉枯残つて居るのも、たゞものではない。

「え、何だい。」

と叱言をいふやうな、得いはぬやうな、音吉は自分を叱るやうに、ぶつ〜……烈しく一ツ横に其の顛巻を引擦つた。

「ま、よ。」

と、魚の腹に望むと、餘りよく、誂へたやうに笹の蓋に乗つて居て、待ちかまへて居るらしい。天秤の、いゝ工合に啜の眞中に荷によつかゝつて、所在なさうに見えるのも、自分が爲た事な

がら、誰かが……誰かが……

六

それでも、がむしやりに思切つた。音吉は血氣だから、一番取ツ組む氣で、片手で仰向いた鮫鱈の、腹の下あたりを壓へつゝ……

恚うまで力を入れるには當らないのだけれども、何だか、出逢つた敵のやうな氣がしたので、一生懸命。

ぬめりと滑かな、而して蒼白い、水紅色の環を環取つて柔かな顎の透へ、矢庭に差入れむとした手首が震へた。

上ずつて腕が硬く成つたのである。

恐しい淵へ飛込むと思つたが、目を眠つたのである。

「痛いよ。」

トタンに耳の底へ、遠い、遙な處で言つたやうに聞えたので、ハツと思ふと目が開いた。音の右手は、手首を籠めて魚の顎へ入つて居た。

しやにむに其の手に搦まつた、腸を曳出さうと殆ど夢中に引摺む。



「徐と、」

と再び、今度は何處でか訝がすると思つたほど、判然と聞えたのである。飛上るほどに、慌てて引くと手が動かぬ。

「曳」と曳くのと、腕がしびれたのと、掌に餘つたのを放したのと、無性に手を振つたのと、地踏躑を踏んだのと恰も同時で。

地へたゞきつけたものから、むら／＼といきれが立つた、生暖かい、咽せるやうな、湯氣の如き白氣一團。

脈々として空ざまに、宙で揺る音吉の肩を籠めて、やがて咽喉をせめて、頬を傳ひ、面を打つて、目を包んだ。

「わい」と反つて、矢鱈に掴んで兩手で目のあたりを搔きのめしつゝ、くる／＼と廻つた。が、苦しく一呼吸ついた時、梗を中に、兩方へ、朦々として眞白な濃い雲の、八九間、障子の如く連つて、立迷つて居るのを發見したのである。

唯狭霧の中に巻かれた如く、蜘蛛の圈に包まれた如く、儂然として、身動きもならず視めて居ると、其の兩方から、少しづつ、薄らいで、段々に、田の果へ消えるのか、身のまはりへ迫るのか、次第に端ぼかしに眞中が濃くなつて、やがて此のあたりには見も馴れぬ、一本の柳をふつくりと

包んだらしい、ものの姿が、すらりと傍に纏まつた。

ト被がすべつた風情、颯と霽れた、積つた雪衣の落ちたのは、地の下に入つたらうか、それとも中空へ飛んだらうか、折から月の傍に、梢を刷いて薄雲が渡つたのである。

扱て其のイんだ姿のまゝに、霞を分けた柳の葉、影艶やかにはら／＼と黒髪を丈に亂して、枝ぶり映る月の隈を、衣ものひだになよやかな、薄色衣の腰細う、頸、耳許、頬のあたり眞白に倅に立つたる美女。撫肩のありや、なしや。袖を兩脇に搔垂れたが、爾時、ほろ／＼と衣紋が解けて、雪の乳房の漏れたと見ゆる、胸のあたりで美しい、つゝましげな兩の手首を開くと、鳩尾かけて姿を斜めに、裳を寛くはらりと捌いた、褌をこぼれて、袂にからんで、月にも燃ゆる緋縮緬。

頸を傾け、月に向へる、玉の顔、眉を開いて、恍惚と目を眠つたまゝ、今ほころびた花かとはばかり、得ならぬ薫はつと散つて、ホと小さく、さも寛いだらしく伸をした。

其の目をばつと鈴のやう、清しき瞳を見向けたが、丹花の朱唇愛々しく、二十を越した年ごろながら、處女のやうにふつくりと、下ぶくれなのが笑を含んで、熟と天窓から視めたので。

大入道なら破れかぶれ、嚙りつきもしたであらう、音吉は唯へと／＼と腰が崩れて、ベツたり尻餅。



顛卷天窓を伏目に見て、美女は、昔から馴染らしい、打解けた笑顔で莞爾。

七

「え、何だね、ぐツ、ぐツ、ぐ、鳴いてるのは、——川底へ泡さ立つやうな、はあ、汐が引くだかな。」

と言ふ聲の汐も退いて、音吉は（爾時、——）と同一皎々たる一帯潮入の小川の月夜、田越にそよぐ蘆の中に、澤蟹のやうな踞み工合。向う顛卷に結目を立てて、目を圓くして黙つた。

傍にぬいと立つ、二抱ほどの大きな姿は、月夜に擴がつた影ではない、一人の親仁の、天窓からすつぽりと霜を被いだ夜具である。

手足とともに、からびた聲して、

「どれ、其の番を一寸見せろよ、序に實檢さしてやるだ。」

「澤山は無えだよ。」

音は蘆の根に手繰つてある、すぶ濡の投網の下から、眞黒な番を釣ると、ほたくと枯葉すれ、寒さに堅いやうな雫の音。小夜具の袖から大きな手で、ぐいと取つた、親仁は鼻の尖で、ざらざらと振つて透かして見て、

「はあ、鰯の馬鹿野郎を二疋か、海津が一ツな。」

と、も一ツ傾けて振ると、ぐツぐツぐツ、此の寂とした中に呟くものあり。

「これだ。此處にはらんばひに成つてござる、此のもろ鰯めが腹で鳴くだ。」

「もろ鰯が鳴くだとね。へい、最う魚の腹に文句のあるのは禁物だよ。」

と薄寒さうな苦笑ひ。

「其のしみつたれな了簡だ。一里塚で魔が魅したも無理はねえ。又もろ鰯の鳴くことも知らねえやうな素人の癖に、何だつて、鮫鱈の臍物を狙つたり、一人で網打になんぞ出かけるだえ。道理こそ、宵からかゝつて、蚯蚓のやうな小魚が三ツ四ツ。あとは番一杯になつて渡り蟹の大きいのが、藻屑の生えた大鉢を、ト構へてござる。

投網で蟹を打つて、大事に番へ入れるやうぢや、ともづりで蜻蛉の方だ。

え、音。」

「あいよ。」

「お不動様の窟の下から、新宿の波打際な、鳴鶴ヶ濱の川尻、此の田越川をかけて網を打つなら、兎も角も一遍は、伊澤様御別荘の、此の七親仁に斷つて呉れ。

二十代の若いものが、夜中に霜が降りればとつて、何だ、其の長股引に草鞋はよ。」



氣の利かねえ居候が、大掃除の溝さらひといふもんだ、裸で遣れ。

泳いで手捕へにする心懸けでなくツちや、思ふやうに網は打てねえ。泡あ喰つた烏賊ぢやなし、長股引で泳げるかい、藝もねえ。」

「む、よ、だからよ、何だ、おらが父爺も同一やうなことを言つて遣込るよ——

(爾時)も矢張……密と網を背負つて出てな、九時が過ぎて一尾もかゝらねえだ、茫乎歸る

か、丁ど父爺め二合半煽つて、爐ばたに大胡坐で昔自慢の潮先だもの。空番を提げて網をびしよ

びしよと遣つた日にや、天窓からこかされて、こつそり夜具を被つても、蒲團の上で幅の利かね

えツたらねえからな。唐突に手柄をして、小遣三貫な處見せて呉れうと、其處ではあ、新宿さお

しかけて、網元から横濱ゆきを一荷貫つて、吉の奴とつるんで出かけた鮫鱈だかね。

おらあ、眞個のこつた。目の前にぶらさがつて居るのさ見て、はじめの内は、何故恚う腹が太かつべいな、と思つただよ。

それがお前。」

と呼吸をつく。

「む、待ちなよ。餘り不思議だ、一概に嘘ツばちだとも思はれねえだ。眞個だら、はい、七親仁だとして抜きかねえさ。——われ、腰さ抜いて、それから、何うした。」

## 八

「七親仁、聞かつせえ——

眞個のこつたが、下ツ腹ががツくりすると、筋がへとくになつたやうだ。腰に他愛がなく抜けただがね、はあ、恥も外聞も何もねえだ。」

「當前よ。肝さ盗んで、馬の杓へし込んで置かうと思つた鮫鱈の腹の中から、そんな別嬪さ掴み出して、それで取組み合つたとか、退治したとか、われが恥や外聞のあるやうな話なら、誰が眞に受けて聞いて居べい。……腰い抜いたで、承知するだ。」

「へ、然うまで言つてくんなさることもねえ。」

と、親仁が放下した番の中を、人指ゆびで突いて悄げる。

「だつてよ、おらだつて抜くべいと、附合つて居るだから可いでねえか、わればかり抜くとは言はねえ。」

「誰が抜いたつて、餘り可い圖では無えだからな。」

「可いわ、それから、われどうしただ。」

「あ、然うやつて——莞爾してな——而してお前、眞紅なのをちらくくと、」



「はあ、舌を出したか。」

「うゝむ、裾だよ。何も見得を言ふぢやねえけど、そんな、もゝんがあで、舌を突出すやうな甘術な奴なら、おらだつて咽喉笛へ喰ひつくだよ。」

「いや、此の方が可恐かつべい。」

「粹で高等とやらで、はあ、神様のやうな、氣高いだ。」

それから、其の、髪さ捌いた、取亂した姿で、裾さ、ちらくとお前、足なんぞ雪のやうに、白いことは、人間にかはりはねえだ。二足、三足、おらが方へ寄附くのだから、唯最う、やたらにお辭儀をした。」

——音吉は脛白く蓮歩を移した美女の前に、這ひ廻つて、石佛の五體に五度、椶に一度、馬の杳の數ばかり、夢中になつて拜んだのであつた——

「其のうちに何か云つた、其の別嬪が何か云つたがな、おらに、(何處へおいでだえ)ツて云ふやうに聞えただ。」

(何故、孕婦のやうだなんて、魚の腹を抉つた。)とでもいはれりや、一も二もなく天窓から鹽だんべいで、耳がぐわんと成つて聞えごとはなかつただけれど、行さきを尋ねるだから、新宿の濱で取れた魚さ荷つて、これから山越に横濱まで参ります、とな、返事ぶつたやうに思つただが、

聲が出たか何うだかな、自分にも分らねえだ。

魔物は見透した。それとも、聞き取つただか、何うだか知んねえ。

(私を一所に連れておいで。)

(夜の明けぬうちに、早く。)と、あるだね。

悪くすると、然うやつて、腰が地へ附着いて居る内に、首さ、椶の梢へ抜け上つて、ばたくて手足を擽いて居る自分の身體を、高い所から瞰下ろされうも知んねえだに、連れて行けは耳よりだよ。

せめて、一里塚抜け出さなくても、呼吸が吐けると踏張つて、背中を荷にして腰い切つたが。後生になるから、一人でさつさと遁げて行け、と言つて呉れば、と思つたのが、然うも行かねえ。

荷繩をかけ直すのを、傍に立つて見てござるだ。

鮫鱈は血だらけになつて、馬の杳の中さ落ちて居たよ。

おら、又、頭の頂邊から慄然としたい。

それを、はあ、拾ひ取りに擡げる時は、何だか知んねえ、徐と、別嬪の顔さ覗いただね。「ふん、其處で物凄く睨んだか。」



「何、矢張、たゞ人間の、極しとやかな、柔和な、思やりのある風で、莞爾と笑つて居ッけ。何事も、承知の上、堪忍して置くわ、私は優しいよ、と云つたやうな顔色で、鷹揚に見えただよ。七親仁。」

九

霜は満ち布けど、月の光が搔消す状の、いひ知れぬものありて、其の間を隔つるや、傾きながら遠いやうな、大空を蘆から仰いで、

「矢張、こんな月だつてな。一里塚を出てから、はあ、街道へか、つただが、並木の松も、あれから山へかけて段々疎らに成るだから、風がなくなつても吹通すわ。

それに、又おらが急いで歩行くだから、はら／＼と裾袂の音がして、其の別嬪がな、人懐しさに、おらと附着いて跣足だね。

榎さ背後から押かぶさつて居た時は、葉は無えだが幹の影が佛に添つたつべい。地面へ腰を抜いたおらが目には、猶の事、大きな脊の高い上蔭に見えたつけが、憊うして見晴しを並んで歩行けば、小柄な婦ちやねえけど、それでもおらが見て肩ぐれえだ。

それに又、さし當り鬼にも蛇にも化けさうにも爲ねえだから、夜の明けるまで此のまんまなら

何の事はねえ。

些と中年増のお嬢様だ。

でもよ、おらが妹とでも道づれで行くやうに、口利ける義理でねえから、黙りで急いだが、時々密と竊むやうにして、横目でちらりと見る度に、唯慄気々と足まで染みるのは、其の妖艶さよ。

だがね、七親仁。

それだけなら、何も變つた事はねえだけれど、どうも眞個もの人間でねえことがあつた。」

「ちら／＼と尾が見えたか。」

と七親仁は夜具の袖に腋を極めた、兩の手を頬杖で、交ぜ返しつゝ眞面目で聞く。

「馬鹿いふもんでねえ、尻尾をつかまへられるやうな、そんな化状ではねえと云ふに。

其のな、變つたことと云ふのは、處々で、ふら／＼とおらが目に入つた、大勢、其の別嬪のお供をするのが、月影に露はれただよ。」

「お供がな。」

「む、はじめ気がついた時は、おら、一里塚の石佛さ、あのなりで、五體、ぞろ／＼とついてござつたかと思つたい。二度目に気がついた時は、最ツと人数が多かつた、ものの十四五人も居



つらうか。

而してな、皆……婦人の姿だつたぜ。」

「奇代だな、すると魔物の頭かな。」

「何だか知んねえ、皆な、恚うやつて、」

と音吉は手を籠めて、ぐつと肩を狭うして、袖口を引合はせ、

「月が寒いから袖の下さ手を入れて、背中から前途の方へ、さつくと、裾がからんで吹く風よ。前へうつむくやうにして歩行いてござる。背後へづらりと一人づつ、残らず同じ寸法の婦の姿よ。袖を抱いた、袂の長い、矢張裳が靡いてな、些とも違はねえやうに、揃つて、前へ俯向いたが、唯變つてるのは、おらが連れのは髪を下げたに。」

あとへ續いたのは島田鬚よ、それも草束ねといふ奴だ。黒くねえ、衣ものも髪も同じ色で、姿だつて、はあ、とんと薄墨の一筆がきで、どくと遣つたやうだ。初中でも見えたと言ふではねえがね。

それが、露はれる時は、さらりと音がして、裾や、袂のゆれるのが、紙子で拵へたかと思ふ氣勢よ。

其十四五人が、づらりと並んだ時もありや、五人ぐれえづつ、ふはくと二側になつた時もあった。つたし、三側に揃つて、列さ短くした時もありな。ひよつとかすると、前の別嬪に知れねえやうに、二人づつ、密と顔らしい上の方のぼやつと白いものを差寄せて、何か囁いたらしい折もあつた。

そら、出た、また見える。で、それにばかり氣を取られて、大分が道を歩行いたが、おまけに、それが、高い所に出たり、づつと低く成つたりなんかして、……何時でも、西か、東か、右か、左か、屹と街道の兩方の路傍へあらはれるのを、よくよく氣をつけて見ると、葉が枯れて白くなつて、寒さうに立つて居る、唐黍のおばけだつたぜ。」

十

七親仁聲高に、

「馬鹿野郎、大方そんな事だと思つた。」

「然ういふがね、此處でこそ然ういふがね。其の場合に差當つて見せえ、唐黍のお化だぐれえで澄まして居られるわけではねえだよ。何だつてお前、其の、通り魔さ行くにつけて、道筋の非情のものに魂さ入るだで。をかした事は、そればかりでねえ。」

芋蕘の葉がな、また變だつたぜ。



處々の物蔭や、枯草の明みへ、黒いんだの、白いんだの、ひらくくと、あのさ、顛破れで尻ッ  
こけの、しゃくんだ長い面さ出すと、浮出したやうな目口が出来てな。こちらを向いては、はい、  
好色ッたらしさうに、おらを翫るのか、姉様を視めるか、目尻を下げちや、にたりく、」  
「呀、そいつは厭だ。」

と參つたやうに、夜具の中で頸を窘める。

「な、それだもの、樂でねえ。月夜をちらくくと雲が走るやうに目につくからな、追立てられる  
やうに急ぐで、途中すがら汗びッしより。」

小休みをせうにも、お前、慄然とするのが附いてござるで、堪らねえぢやなからうか。

すたく夢中よ。

(澤山來たことねえ)

ッて婀娜な聲で言つたんで、又耳がカンとして月夜に響いた。

おら、お前、吃驚して立停まつた。

氣が附くと、はい、最う能見堂の山道さ半分が處上つて居るだ。道理こそ、先刻から時々手足  
が蔭になつた、おら目が眩むのだと思つたに。

了つたい、え、お前、難船の島蔭と、一里塚から手繰りつけるやうに當にして居た、そら、

坂の根ツこの建場さ、早や何時の間にか通り過ぎた。

旨く行きや、先ばしりの利七も甚太も未だ居よう。婆様が軒の柿の枝さ見つけるを合圖に、妖  
物だ！とか何とかいつて、遠くから怒鳴らうと、それを力に喘いだに、何のこツた。

吉の臆病、今頃は大根葉の新漬で炊立ての飯を食つて居よう。焚火さ踏跨いで、利七徒が飲ん  
でるか、ふかくと湯氣の立つ汁もあんべい。彼店さ、お縫ひ坊も起きて居べい、と一時に思ひ  
出すと、赫と逆上せて、はあ、へとくと腹が空いて、げんなりだ。」

「其處で、又腰を抜いたな。」

「む、まあ抜いたかも知んねえが、芬と、はあ、蘇生るやうな佳い薫がした。

魔ものの身體のそれでねえで、人間らしい、結構な、苺の香だ。

天の助けよ。

人間くさいと昫すと、八九間上の路傍さ、茨まじりに薄の枯れた、低い土手に腰を掛けた、洋  
服扮装、大きな姿が、月あかりに薄く見えない。

おまけにお前、肩の上へ、キラ／＼と光つてな。」

と音吉は川べりに面を出した、水に流る、月の影、小波に搔寄せけむ、晃然と一條、彼處なる  
別莊の、水に臨んだ欄干を貫き、向う岸なる枯蘆の折伏す隈に輝く物あり。漆と銀の竿一根。



「遠さも丁どあのくれえに、おなじやうに光つて見えただ。」

「まさか、山路を釣竿ぢやあるまいの。」

「鐵砲だ。」

「む、まあ、内の御前様の釣と来た日には、山路を釣つたつて、川を釣つたつて、些とべこ違ひごとはねえけれどよ。」

七親仁は言ひかけて、蘆に踞んだが炬燵のやう、差寄つて聲を密め、

「其の癖、夜が夜中まで釣つてござる。矢張りお部屋様が勧めるだよ。唯た今も、あ、やつてお寢室に附添つて居るだかな。また、あの方が世話をすると、希代にひらくくと魚が掛らあ。」

ふむ、尋常ごとでねえやうだ、音やい、其時か。——……

十一

「其時だかな、而して何かね、七親仁、今時分までお部屋様も傍に居て、お世話をするかね。」と音も寄つて、低聲にうら問ひかけるのであつた。

「一所にも。先刻もお前、お部屋様さ、例のそれ、緋縮緬の襦袢か何かで、手燭を持つて、主公様さ肩にかけまして厠にござつた。知つての通り、此の頃ぢや、最う、獨でおひろひは煩かしい

で。——

成程然う云や、去年だの……能見堂居廻りへ鐵砲打ちに行かして、(昔、知合の婦人ぢやが、命にかゝはる事があつて、乃公の袖に縫つたに因つて、何にも言はんでかくまひ置け。)とばかりの觸込みで、今の、お蘭の方さ連れて歸らつせえた、そちこち其の時分からの、あの御病氣よ。何だつて、主公様は唯兩脚が矢鱈とだるくつて、段々細くなるといふ、妙な煩ひでねえか。

此頃ぢや、お前、左の脚なんぞ、支いてござる杖よりか細くなつたぜ。

いくら氣が丈夫でおいでなさればとつて、まるツ切り動くことがなんねえだ、始末が悪いよの。どツと床に凭つかつて所在がねえだから、まあ、寝ながら釣でもなさるだ。

あのくれえな主公さまだから、人泣かせの、無理も八ツ當りも言はつしやらぬが、夜なんぞ癩が高ぶらずに。

幸ひ、お部屋様がお氣に入つて、片時も傍さお放しなさらねえ工合だで、下々此方人等まで大助かり。

それに行渡りはよし、氣はつくの、高ぶらずよ、優しいわ。拔かりなく、粹に行届いて、然もお前、おつとりとして居なさるだ。蔭ぢや皆、はい、お蘭の方様で拜んで居るわけだでな。

始終附添つて居さつしやら。



それ、先刻もな、然うやつて片手、お部屋さまの肩にかゝつて、片手で、お廊下さ、ドン／＼と杖支いて、廁りへ來さした。手水鉢で手を洗つて、お部屋さまが、慥う媚かしく、支膝で手拭を持つたが、(良い月だ、)ツて言はつせえた時、おらを、はあ見つけさした。

おら、内證だが、ひよぐりに出てな。あ、い、月だ、とお前、身ふるひをすると、川上で、ざあツ、とやるだ。

はてな、下手さうな捌きだわえ。尤も宵の口、今夜さ網を打ちますと、七親仁が處へ斷りに來せたでねえから、もぐりだで、旨からうわけはねえ。

それでも暗夜を打たねえばかりが見つけものだと思つての、嫌でねえだから月は良し、一番そこいらまで出て見べいか、寒さは寒し、と二の足で居た處よ。

(七、川上を大分荒すな。)と主公さまがおつしやつたで、今夜は思ふやうにかゝらねえかな。かたがた威かして遣るべい、と其處で、はあ、ぶらん／＼下駄さ引摺つて、其處まで、内のジヨン(犬の名)に送られながら、來て見ると、われが、はあ、蘆の中さ、頼が憑いて、網を持つて踊つてるだ……」

「え、親仁、此の上、また頼に憑かれて堪りごとあるものか、澤山だ。」

「いや、われよりか、主公さまよ。」

「おら、如何に御最眞になつて繁々お別荘へ參ればとつて、お臺所口か、お庭さきよ。變にお心安いやうぢやあるけれど、お部屋さま、見るのはちら／＼だが、親仁は然うやつて寢衣姿も拜むもんだ、久い内にや、何か變つたことでも無えだかえ。」

「然うよの……」

と、かぶつて居られず、夜着から出した小首を傾け、

「別に慥うて事はねえだけど、可恐く海が好きで。間さへありや、窓をあけたり、柱に凭つたり、いつも沖の方さ見てござるだ。」

での、風か、雨か、海の色のかはらうといふ時は、はあ、缺かしごとねえ、何時でも立つて視めるだが、其時は、いつまでも見入つて恍惚としてござる。沖の方さ、故郷でもあるだかと、蔭で風説して、又海の色がかはらう、と云ふくれえよ。」

海の浪は、常に此の美女の姿を前に、色をかへて立騒ぐのであつた。

十二

「それに今もいふ通り、あ、やつて主公様に退屈をさせねえだが、お部屋様が世話をなさると、不思議に魚が釣れる事よ。——む、未だそれに、何よ、過般二尺ばかりの鱸が掛つて、水際を放



れると、棹が満月のやうになつて、光つた時よ。

(御前さま、釣れましたね)ツてお前、お部屋様も、はずまつせえたか、ふいと脇かけ窓の小縁の上へ飛乗らしつけえ。

おら、汐留の蘆垣の蔭から、釣れるだかな、と立つて見て居たがの、わあ、身を投げさつしやるか、と魂消たね。

お部屋さまの姿さ、倒に水に映つたでねえか。

主公様は脊は高し、大柄なり、高い敷蒲團の上に、今のそれ寝ながら乗出して釣つてござる。

脇かけだとして、随分高いわ。畳に坐つて居さつしやると、お髪ツきや、外へは見えねえやうだに、ひらりと飛んでな、欄干へ袂がかゝると、いきなり釣糸さ引かしつけえ。おら鱸の刎ねるのより、其の白い手に氣を取られて、はあ、何と云ふ身の軽さだ、踊でも仕込んだ身體だつべいと思つたが、成程、よく／＼考へりや、人間業でねえやうだの。

其のほか別に、はあ、慙うと云つて、湯殿の中でも、髮結にも、變つたところは聞かねえだ

よ。

ぬしも靦面に知つて居て、別に變だとも思はねえだか。」

「思はねえ。つい此の間も、ジヨンの奴にからかひながら、お臺所口さ面を出した、晩方だつけ、

飯時で、女どもさ忙しさに働いて居つけえな。

奥からあの人さ出てござつて、

(お急ぎ遊ばすよ)ツて、何だ、戸棚から、はい、自分で西洋皿さ出して、ぐい／＼拭巾をかけながら、土間に踞んで買ひたての大根さ突いて居た。おらが方を見て、何にも言はねえで、また、あの、莞爾さしつけえ。

(皆な承知だよ、何にもいひでない、深い馴染だね。久瀾)と其の涼しい目の動きやうと、口つききの鹽梅と、頬の工合で、ちやんと、おらが胸に通じたがね。

女中が皿を受け取つて、七輪で、良い香のして居た、何か肉さ、一寸々と装つて盆にのせて出したのを、其のまゝ持つて、ツイと廊下の方へ入らしつけが、三ツ輪に艶ツぼく結び込んで、赤草のつまのかゝつた上靴なんか穿いてゐるだ。お蘭の方は、あれだとばかりで、鮫鱈の腹から出た、素性を知つても疑えねえ。堪らねえ頸ツつきの、後姿さ伸上つて見送つただが、卵の毛で突いたほどの、鱧も尾もあらはさねえ。

あとでお銚子の行くのを見て、あれを引きつけの、かんちろり、畜類め、と妖物と遊ばつしやる主公さまさ、あやかりたいやうな氣がしただが、女たちから、はあ、蔭ながら御容體を聞くと、申戯ではねえ。――



今も、親仁が言つけがね。最う此頃ぢや、右の足も瘡せ細つて、押魂消たおらぢやねえけれど、お腰さ抜けたも同然だといふからな、氣になつて堪らねえぞ。

知つての通り、おらが父な、惣領な、おらまで御恩になる主公さまだ。

唯御病氣と聞いた處で、蔭で信心ぐれえしねえければなんねえだに、何うも其のお煩ひさ、お部屋さまの所爲に違ひごとはないと思ふだ。

其の魔物さ、おらが不簡から、此の世の中へ引き出して、途中で主公さまに押つけたわけだからな。

申譯がねえ、はあ、何うすべい、と些とばかり氣を揉んでることではねえだよ。

其の時分にや、言ひおくれた。

おかくまひなさればとツて、直ぐに、あくる日から騒ぎでねえか。

伊澤さまのお別莊へ、天人見たいなお嬢様が、と先方から話しからかれて、何、そりや鮫鱈の腹からこれくだ、と面と向つて、何と眞晝間話されべい。」

十三

「たまには、極く遠慮のねえ友だちに、眞面目に雑と話すとな、聞く奴はあたまから不思議とも變とも思はねえ。

龍宮から、……然うよ、魚の腹へでも宿つて來さらに、人間にやねえ別嬪さまだ、と一も二もなく合點して了ふでねえかね。何にもならねえ。

其の中、主公様が御寵愛と、薄々濱へ聞えるでな、御恩になる主公様を、おらが口から魔道に落いて、妖物の婿にしては濟むめえ。夢だくと思ふうち、何だか、うぬが方が夢になつて、先方さまは正眞實ひなしのやうな氣になつたがね、怪しいお煩ひだで、又黙つて居られなくなつただよ、胸がむら／＼として居るだ。

先刻から綱さ打つても、魚よりか、はあ、あの、晃々する、主公さまの釣竿にばかり氣を取られてよ、沓え切つた此の月さ見るにつけて、然うだ、去年の丁度此の月だ思ふ處へ、よう七親仁。お前ら、此處へ來て呉れたは、神様お引合せだと思ふだな。嘘か、眞か、お前年紀の功で、よく分別をして呉んねえよ。おらにも何だか分らねえ、馬鹿め、そんな事があるもんか、と一口に言はれりや、それまでだ。

親が貧乏で、年貢の未進、水牢ぢやねえだから、何處へ駈込み訴さするでもねえだが、黙つて居ちやなんねえから、笑はれるのを承知で話すだ。腰を抜いたまで、白狀したで、おらの言ふことに嘘はねえだが、何うだね。」



「あ、れ、」  
「ひやりと手に觸つたのは衣でな、するりと這つたと思ふと、わけもなく身を轉はした。  
おら突のめつて、むツくり起ると、  
ツとお前、何處を押しや、あんな可愛らしい、しをらしい、情らしい、あはれつばい聲が出る  
かと思ふ。」

と言つて寒からう、夜着の袖に身を寄せて、音吉は震へたのである。

親仁もためいきで聞いて居た。

「む、何うも話の様子ぢや、魅されたにしても、確なものだの。」

と言ひかけて苦笑ひ、

「何も、はあ、魅されたに確は要らねえこんだ。だがね、おらも何だか變になつた。

お前が主公様を思ふこと承知なり、氣心も知つとるで、萬八とは思はねえが、成程、こりや人が聞いても承知はしねえ。それにしても、はい、おらが主公様ほどのお方がよ。希代だな。」

と頻に傾き、しばらくして七親仁が、

「で、何か、お前、爾時主公さまには、何にも其の事を言はねえだな。」

言の下に、

「言つたとも！」

言つたがな、これが吉なら眞實にもしたらうが、主公様ほどのお方だから、てんづけ、おうけ

とりはなさらねえのよ。」

「然うよ、然うよ、そんなものよ。」

「おらは、それ、能見堂でまへの、坂の途中で、山獵にござつた主公様のお姿を見たがな。尤

も其の時は誰だかも分んねえ、薄の中の影武者だね。」

「うむ、然うよ。」

「姿は狩のそれだしよ、鐵砲の銃口さ、あの通り、竿の漆が光るやうに月に映らあ、おらあ、ぐ

ツと強くなつた。

それに親仁、恚う坂道へ並んだ處は、先刻も言ふ通り、華奢な、かよわい婦人だからな、同じ

取組むにも松の木と、薄だよ。

おまけに、鐵砲もありや、人もあると思つたから、赫となつて、突然お前、

(こん獸ア)と武者ぶりついた。」

と、ぐツと力手を伸ばしたので、親仁は退つて、足を踏んだ。

「ふむ、」

「ひやりと手に觸つたのは衣でな、するりと這つたと思ふと、わけもなく身を轉はした。

おら突のめつて、むツくり起ると、

(あ、れ、)

ツとお前、何處を押しや、あんな可愛らしい、しをらしい、情らしい、あはれつばい聲が出る  
かと思ふ。」



「ふむ、く、ふむ。」

十四

「纖弱い、細い、悲鳴を揚げて、綺麗な鳥がそれたやうに、月夜をはらくと駈け出して、己からお前、鐵砲の下へ飛び込んで、其の狩武者の袖へかくれたなあ。」

「はての、」

「おら、はあ、呆氣に取られて、しばらく宙にぶら下つて居たッけよ。」

其奴は、と言はうと思つて、恚う身構へして、坂を、十足ばかり上るとな。」

薄の中で影が分れて、すつくと立つた狩装束。――

ふかくと煙立つて、爽かに露を拂ふ、紫の煙濃く、太き葉巻をくゆらしながら、悠然として來り迎へた、廣額疎髻、鼻隆く眉迫つて、豹の眼の老紳士。是なむ號を槐庵と稱して、湘南の地に都を避けた、今は在野の老政治家……何某の侯であつた。

(何ぢや、音か。)

(ひやあ、主公。)

「おらを見て、いきなりだ。」

(いたづらをするな)とばかりで、呵々と、はあ、叱りつけるやうに笑はつしやつたらうでねえか。

とんと、おらが手籠めにして、なぐさみかけでもしたやうによ。

何でも魔物めい、死ねえけりやなんねえ義理があつて、一里塚の榎の枝へ扱帯をかけて縊つたけれども、石佛様が五體揃つて月あかりで見でござるで、後髪さ引かれるやうで、死に切れねえし、死なねばならず、しくしく泣いて居た處へ、おらが通りかゝつて、無理やりに助けて呉れて、婦人一人ぢや夜道は危い、兎も角も一所に來う、悪いやうにはしねえからつて、連れだたせて、道々それを恩にして、いろくいやな事を言つたけれど、死なうと思ふほどのものが、何うしてそんな、野道で浮いたらしい事が出來よう。

頭ばかり振るもんだで、とうとう彼處へ來て、恐しい事を。あの男はいたづらに目が眩んで、お姿は分らん様子、お見かけ申して縊るだで、助けてくと遣つたものよ。……畜生現在のに、無理のねえ處を言つて誑らかさあ。

(どうぢや、婦人は然ういふぞ)ツて主公さまは、それにして了はつせる。

飛でもない事をおつしやらあ、實はこれくでと、魚の腹のことを低聲でいひく、露顯に及んで、きやツと言つておらが咽喉へでもかぶりつきはしめえかと、氣がさすからな、少し離れた



婦人の方を、一寸々見たがな。

別嬪がよ。然もく、身體を投げ出して主人さまに縋つた、と云ふ風でな、いま其のお膝へ倒れ込んだまゝ、茨に長く裾さ曳いて、襦袢の襟も脱けたなり、横すわりに、尾花の穂の燃えるやうに片膝ついてよ。震へながら、頻りと慥う、思はせぶりな優しい手つきで、重いやうに髪を撫でつけて居るではねえか。

主公さまは其の姿と、おらが顔とを見較べさしけえ。

(何、魚の肝が彼女になつた、馬鹿いへ、野郎、)

ツて眞個にふき出さしつけえ。

啣へてござらしつた、葉巻がの、煙つたまゝで、ばさりと落ちたで。

おら、慌てて拾つて吸つた。」

と煙草を挟んだ指のかまへ。音吉の鼻の尖に指二本、丁寧に目を据ゑて吹かして見せる。

七親仁は、きよとんとして、つまゝれ顔。

「何だ、それは、」

「一本五兩と聞いて居ら。勿體ねえ、逆も突合詮議をされた處で、おらが公事は勝ちさうにもねえだから、せめて、葉巻でとヤケに出てな。」

「しみツたれな眞似をすらえ。」

「うむ、主公さまも然う言はしつけえ。」

(音、そんな事をする了簡ぢや、いたづらも仕かねんぞ、さつさと働け。煙草をやるから歸つたら又來いよ。)

とばかりで、ほかり、と靴の音さして、婦人の傍へ行かつしたが。

おら、其の此方側をな、荷物を擔いで、こそくと尾花すれに通り抜けた。何だか、お邪魔でもするやうだよ。

其かはり、峠に上つて、思ふ狀葉巻をふかした。——其の馬鹿さ加減を聞かつせえ。」

十五

七親仁分別顔して、被つた夜着をかなぐり脱いだ。尤も話のなかばから、大方丈の抜衣紋に、背中へ懸けて居たのである。

「音、おら、此處で聞いたで疑はねえだが、其山路でやられては、主公さまでねえと云つて、誰がお前に手を上げべい。たゞ事でねえな、音。」

「む、何うしべいと思ふだね。」



「待ちろく、月も同じ一週忌だ。はあ、何事も年忌々々よ、此のお月様の工合では。」

と禿げた額を照されて、霜置く眉を擧めながら、

「時刻も彼是、其の時だつべし。愆う、又しんくくと更けるだに、川邊のお亭に主公さまと二人切だ。ちよつくら忍んで行つて見べし。

何かがあるべしさ。行つて見べし。」

「これからか。」

「お、よ。」

「直ぐにな、」

と、音吉は身を起したが、ざわくと、蘆吹く風に大きに逡巡く。

「汝が發頭人で居て、何の状だ、さあ、来うよ。」

「だつて、お前、だつてお前、向う岸から覗けばだが、月あかりでは届くめえ。夜夜中何處からお聞が見えるもんか。」

「其處はよ、天道様おあつらへだ、寝ながら月の見える仕かけよ、お縁の雨戸は硝子張だ。」

石燈籠があるばかり。隠る、隈はなかつたが、一面の芝に躑音立たず、ぬき足の影法師と、さし足の四人づれ、影を踏倒して一人づ、黒く雨戸に摺つた、中なる障子も硝子越。

呼吸を詰めて、差覗くと、湯たんぼの薫や籠る、蘭奢の香や立迷ふ、燈はたゞ春の水に、月やや長き趣にて、朧々と艶なるに、厚衾敷設けた、金欄の雲高き中に、胸の下まで搔卷かけて、枕を乗り出した肱かけ窓、主公は片肱かけながら、細目に開けたる窓の外へ、白銀の棹を手にしつ、轉寢をし給ふらむ、寂として、身動きせず。

唯見る、此方に雪なす頸脚、結ひたての三ツ輪艶かに、徐と据ゑたかと差俯向いた、腰の扱帯の薄紫、霞に靡いて身を空に、主公の袂にすらりと輕う、半ば乗つかゝるやうにした、美女の後姿。

二人は顔を見合はせて、ひつたりと差覗く。――

美女は愆くて主公の足を、柔かに撫り參らせつゝあつたのである。

やがて、するりと身を引いて、すらりと障子の蔭に立つた。が、黒髪の色を籠めて、天井が高、暗く、凄いやうに見えたのは、思ふ二人の迷であらう。

時にはらりと衣の音、棲の運びにちらめくは、雪を包んだ未開紅。

ちらりと袂を拂つて、主公の寝て踏延ばした、爪尖のあたりへ移つた時、屹と艶麗な横顔で、枕の方を流眄に掛けた……やうであつた。

搔卷の裾を柔かに、ふつくりと廻つて向う側、今度は主公の右の足を。



片膝ついて褥にかけると、ひらくと炎が燃えた。  
二人の面は熱かつたが、否とよ、こぼれた緋縮緬、やがて白脛に冷く消えた。  
琴に差向ふ風情して、揃へてさした白魚の指、左右へ開いてしとやかに、且つものやさしく、  
徐と又搔擦りはじめた時、月影彼處に透くよとする、顔清く衝と上げて、流るゝやうな瞳を此方  
へ、眉を開いて莞爾して、直ぐにもとの、ふっくりとある伏目になった。が、其途端に、二人は  
天窓から慄然として、音の如きは逃げようとして、やつと止まつた。

(いゝ兒だ、おとなしく見ておいで、皆承知だよ、)

と言ふやうに見えたのである。

さて、今更退くにも退かれず、凍つて了へ、と立窘む。

しばらくして、又ひらくと炎が絡んだ。

吃驚すると、美女の袖口から、主公の搔卷の袖に映つて、嘗めて行くやうに燃え上る。

あゝ、膝からも紅が、裾からも流るゝ炎。

此方の傍から、裾をまはつて、向うに運んだ歩行のあと、いかに、いつも身を放たず、名にも  
人目にも立つまでの、緋縮緬の襦袢とはいへ、影も疊の蒼きに映つて、友禪ぞめの花の川、俤に  
こそ立つたりけれ。其處も彼處も紛ふべうなき、一面の炎となつて、煙むらゝくと立蔽ふに、燈

火は暗くなつて、中にも一條矢の如きが、柱を巻いて、緋の環をかけて閃いた。

「火事だアい。」「火事だ、火事だ。」

喚くも叩くも殆ど同時に、音と七の四ツの拳が雨戸を揺つて、未だ煙はかゝらぬ廊下へ、月影

とともに躍り込んだ。

小力のある音吉は、夢のやうな火を熱く踏んで、二三ヶ所火傷をしながら、無言で主公に飛び

ついた。

「天の網だッ。」

天井を抜く破鐘聲、七親仁は半狂亂で、仔細あつて雫も切らず、先刻から引提げて立忍んで、

計らずも我生れ得て、網を打つに妙を得つ、若き折に、寒月に裸で波に捌いたも、今此の時の用

ぞとばかり。

すつくと立つた美女の、炎の中に倂白き、黒髪かけて天井一杯、颯と、火の網を投げたる手

練。

網の目炎に染つたのを、一目見て、飛んで出た。庭前は早や火の粉の雨。潜り抜け、

「主公さま！主公さま！」



「此處だよう、此處だよう、」

と遠くで呼ぶ、音吉の聲を知るべに、堀を出て表通り、向う側に田圃の前なる、小さな煙草屋の垣根の處に、音吉は、主公に附添つて、火の手を睨んで居たのである。

「お、主公さま。」

と七親仁は、唯くるくると廻つたが、

「音、頼んだぞ、」

と言ひすて、斜ッかけに又堀の内へ駈け込んだ。

邸の内は寂として、却つて門の外に五六人、わやく立ち騒ぐ人の影。

霜を装ふ大空冴えて、炎の色は薄紅梅。火花は星の中に燦然として、且つ消え、且つ飛び、煙は渦を巻いて立騰れど、忽ち河水にかすれ行きて、濱の松の夜影も包まず、櫻山の頂刈る、利録の月を見てあれば、騒ぎぞ、人々、我かくてあらむほどは、たとひ二十日の影なりとて、かばかりの煙に、月夜にやは隈あらせむ、と冷やかに差覗ける風情なり。

遠近の啜、畦道、川上の橋の上かけて、提灯の數ちらくくと、灯連れて顯れた。が、恚る田舎のことなれば、狐の嫁入と云ふものめく。

親仁が主公の杖を捧げて、引返して來た時は、川に臨んだ一水亭、母家へ渡殿の半ばで焼留つ

て、お邸は二階の人も無事との報知。

「お亭は、骨ばかりの火になつて、柱も鴨居も、まるで朱で描いたもののやうだ。音、行つて見べい、御免を蒙つて、」

と、さそつたには仔細がある。網で伏せた美女の亡體で。

主公は何となく、黙つて領きたまひつゝ、杖を片手に、片手を柴垣の上にかけて、音吉の手を離し給へば、勇んで、二人して又駈出した。

堀際に差置いた、消防の梯子、長三間ばかりなのに、言ひ合はせたやうに手をかけて、

「遣つて見べいか、」

「遣つて見べい。」

顔を見合はせて頷き合ひ、するくると引摺つて、諸共に取直した、片端を兩人の手。斜に縦に持直して、

「ありや、」

「やア、」

と、きほひの懸聲。

燃残つて立つた、柱、壁ともいはず、鴨居と云はず、川へ向けてめつた突き。



五ツ六ツ振ると、もう最う疲れて、

「やあ、ほう、」

「どっこいしよ、」

と言ふ下に、火の柱、火の鴨居、火の床の、眩かけ窓によつた片隅、上下にかさなりあひ、ぐらぐらと揺れて突と水。

火の粉塵と立ち榮えて、煽にひらりと燃えながら、河の面に碎けたが、炎の煽が風を起して、引汐時を流れ落ちず、逆に川上へゆらりと二三間、曉方の汐のみちりて溢るゝばかりの波に揺れて、ゆらりと山へ上るやう。

炎に紛ふ緋縮緬、唯見れば燃ゆる鴨居を裾に、扱帯の色もありのまゝ、従容として、川浪に立あらはれた其の美女。一本の火の柱、火先に腕をからませながら、白やかに搔取つて、斜めに權を操りつゝ、二人を見て又あからさまに莞爾した。それもこれも定まる運の、主公を屠らむとして過ちし本意なさよ。さらば、と言ふが……瞳に宿つた。

あれ〜とばかりに、二人は炎の船を追うて川ぞひに、やがて主公の、在す方。

「主公様。」

「あれ〜。」

「呀！助けんか。」

と仰するほどに、山の腹に揺して、中空を渡る音。風があらぬか、岩打つ浪が、タトタトタトと土を刻んで聞えたが、眞近になつて、タと留むと、一個の黑影、月の下に露はれて、身動きをしたと思ふや、颯と風の如く駆けて来て、あふつて、主公を雑倒さうとして危く留つた。

「危い！」

「誰だ、」

と、七と音、我を忘れて夢中で怒鳴つた。

「槐庵々々！槐庵！」

高らかに侯爵の號を呼んで、衝と目の前に突立つたは、白銀の兜に、同一白銀の大鎧、ざつくと着た、身の丈抜群の神將一員。

征矢一筋、半弓を脇挟んで、朱の如き眼を睜き、藍碧の面に怒を含んで、

「御身、人爵の榮を得て、世のために功あるが、天職を忘れたり。見よ、あの婦人。」

と鎧の袖、水晶を削る音して、川の面を顧つた時——美女は取りかへて、火の柱を屹と小楯に取つた。

「あの、夜叉、足下の手に滅ぶるやう、天に於て掟したるに、足下の怠慢、再び海に放ち終んぬ。」



昭和十七年三月二十五日 印刷  
昭和十七年三月三十日 發行

鏡花全集 第九卷  
會費 貳圓六拾錢

(寺島製本)



著者	泉鏡太郎	東京市神田區一ッ橋二丁目三番地
發行者	岩波茂雄	東京市下谷區二長町一番地
印刷者	井上源丞	東京市下谷區二長町一番地
印刷所	凸版印刷株式會社	東京市下谷區二長町一番地

發行所 東京市神田區一ッ橋二丁目三番地  
**岩波書店**

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

電話九段(33)一八七番(4)  
振替口座東京七四四一六番  
會員番號一〇二〇三七番

小直店物版出に就ては永久に責任を負ひ度く存すまじら落丁・亂丁の場合は  
直小店へ申出下さい

世の禍 又是よりして幾何ぞ。あれ、見よ、今の機を逸すな、勤めずや、槐庵。  
 とて弓に矢を添へて與ふるを、此の老政治家は我を忘れて、戦きながら受け取つて、川面を見  
 向きもあへず、あはれ力なく足なえて、礮と地の上に倒れたのである。  
 火事のなごりの薄煙、水あかりに颯と靡いて、炎の權も、火の船も、東雲の空に紛るゝ、兜鎧  
 の色に分れて、沖へさして引潮時。  
 鼻唄まじりのポンプの音。曉の浪が打ちはじめた。











